

スリランカの日本語教育への協力

— 中等教育機関のスリランカ人教師支援 —

山本和子*

要 旨

スリランカでは日本との国及び民間レベル双方の交流が盛んになった 1980 年代後半から日本語学習者が急増している。特に中等教育機関で高等学校卒業と大学入学資格取得試験を兼ねる国家試験(Aレベル試験)の受験科目の一つとして日本語を学ぶ学生が 1990 年代に激増し、現在学習者の 6 割を占めている。スリランカ人教師も確実に育ってきているが、スリランカにおいて教師養成・再教育は充分に行われていない。又、日本から公的・民間派遣プログラムにより教師が派遣され、様々な教育機関で活躍している。しかしながら、スリランカの言語であるシンハラ語の能力が求められる中等教育機関への派遣は積極的に行われていない。本稿では日本人教師の中等教育機関での活動状況を把握し、学習者の学習動機に関するアンケートと授業観察の結果から、中等教育機関での日本語母語話者教師の活動方法の一つとして、個別のスリランカ人教師支援を具体的な内容とともに示した。

キーワード：中等教育、A レベル試験、日本語母語話者教師、スリランカ人教師

はじめに

スリランカと日本は友好的な外交関係を維持してきている。仏教国として両国の仏教僧が文化使節を派遣し、文化及び相互理解の促進に多大な貢献を果たしてきた。第二次世界大戦直後の外交は文化的な交流が主であり、学者、学生の交流を始め文化使節や文学作品の紹介等の活動が行われ、両国の関係が緊密になっていった。

1948 年スリランカは独立し、その後 1950 年代からスリランカと日本相互間の貿易が盛んになり、1964 年にはコロンボに日本貿易振興会(ジェトロ)が設立された。スリランカは日本から軽工業品を輸入し、日本へは原料を輸出してきた。1970 年代スリランカは日本から灌漑施設や社会基盤整備のための資本財を輸入し、さらに 1977 年にスリランカ経済が自由化され、輸入制限が緩和されると日本からの輸入がさらに増加した。今日日本からの輸入は小さな文房具から最新のコンピューター機器、医療器材、機械機器まで様々である反面、経済政策が変わった後も日本へのスリランカの加工品等の輸出は伸びていない。

日本はスリランカにとって第一の援助国である。1982年に国際協力事業団のスリランカ事務所が開設されスリランカへの援助の一部を担っている。協力は農業、医療、空港や港湾などの社会基盤整備、教育等の広い分野に渡っている。1973年から1997年の間に3,395人の研修生を日本に派遣している。研修分野は農業、林業、漁業、人的資源、医療、社会福祉等多岐に渡っている。国際協力事業団は発展途上国へ青年海外協力隊¹⁾(以下、協力隊)の派遣を行っている。スリランカにも様々な分野に若者が派遣されている。日本語教育分野には2000年3月時点で5名が四つの教育機関で活躍している。

スリランカの日本語教育は約35年の歴史がある。日本とスリランカを行き来する人が増え、二国間の文化的・経済的な関係が増し、日本の援助が人々の目に触れることで多くの人々の日本への関心を高め、その中から日本語を学ぶ人が出てきた。1990年代に学習者数は急増し、スリランカ人教師も育ってきている。日本人の日本語教師は公的・民間双方のプログラムを通じて派遣されている。この様に1980年代から約20年間のスリランカの日本語教育は学習者の増加・多様化、スリランカ人教師の質的量的充実、学習教育機関の地方への広がり、国際交流基金による派遣プログラムの定着などその成果は多大なものがある。しかしながら、教材不足、教授法情報不足、設備不足などの様々な問題を抱えていることも事実である。日本人日本語教師の派遣については、1999年3月時点で日本語を教える12名の日本語教師のうち5名が高等教育機関、2名が中等教育機関へ、4名が学校教育以外の機関へ派遣されていた。又、派遣元別に見てみると公的派遣の日本語教師9名は高等教育機関と学校教育以外の機関へ、民間派遣の日本語教師2名は中等教育機関といったように派遣先の機関と派遣人数がかたよっている。『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・1998年－』(以下、1998年基金調査)によるとスリランカの学習者の6割は中等教育機関の学習者であり、彼らは第12学年から第13学年の2年間の高等学校在学中に3科目を選択し、最終的にGeneral Certificate of Education(Advanced Level) Examination (以下、Aレベル試験)という国家試験を受験する。これは高校卒業及び国立大学入学資格取得試験という重要な試験である。その科目の一つとして日本語を学ぶ学生が1990年代に急増している。このような状況にもかかわらず、どうして日本の公的プログラムの中等教育への協力が積極的に行われないのであろうか。

本稿の目的は中等教育機関への日本語母語話者教師の活動状況を知り、現状を踏まえ今後日本語母語話者教師のどのような協力活動が可能かを探ることである。まず、スリランカの日本語教育の全体的な状況を把握し、次に中等教育の状況を学習者へのアンケートと授業観察からも検討し、どうして日本の派遣プログラムによる中等教育への協力が学習者の増加にもかかわらず積極的に行われないのか、

さらにどのような取り組みが今のスリランカの中等教育に可能かを探る。尚、スリランカの日本語教育についての研究は非常に少ないが、1990年代の中等教育及び中等教育教材開発については宮岸（1997a,1997b,2000）が詳しい。

1. スリランカの日本語教育の現状

1.1. 日本語教育機関

スリランカの日本語教育は高等教育、中等教育、学校教育以外の教育機関で行われている。表1は教育機関数をタイプ別に表したものである。

高等教育機関には大学2校、大学院1校、技術短期大学1校がある。ケラニア大学では1978年に課外コース、1980年に学位コースが開講した。学位コースでは学部生としてAレベル試験に合格した学生及びこれと同等のレベルの学習者を入学させている。1980年より過去20年間国際交流基金より日本語教育専門家が派遣されている。

サバラガムワ大学は1991年にスリジャヤダナプラ大学の短期大学として開講したあと、1995年11月にスリランカの12番目の国立大学に昇格した。1993年7月より協力隊員が派遣されている。現在、社会科学・外国語学部で日本語が教えられている。スリランカの中央部に位置し、日本語未習者も受け入れ、コロombo地区以外の日本語教育の中心になると期待されている。

コロombo大学大学院日本研究科修士課程は1995年に開講した2年制の夜学コースで、1年次は日本の経済、経営、社会と文化、歴史と国際関係、日本語の講義が英語で行われている。2年次は修士論文と日本語の補講で構成されている。第2期(1996年入学)と第3期(1997年入学)の学生の20%はケラニア大学の日本語の学位をもっていた。1995年開始時より国際交流基金から毎年6ヶ月間日本の大学の教員が1名派遣され1年次の日本語以外の1科目を担当している。又、日本語の授業については(財)シルバールンティアから日本語教師が派遣されている。

中等教育機関は1980年代に2校がAレベル試験の受験科目として日本語を教え始めた。その他の学校(以下、Aレベル校)は1990年代特に後半に日本語を教え始め、1998年には日本語コースを持つAレベル校が24校になっている。1980年代に開講したコロomboの2つのAレベル校(女子校)はマレーシアのように国の政策²⁾があって日本語を教え始めたのではなく、日本滞在経験のある一教師が教え始めたのである。24のAレベル校のうち14校はコロomboに、7校はコロombo近郊に集中している。

学校以外の教育機関は私塾を含めた日本語講座であり、8つの公立のコース、24の私立のコースがある。これらの内継続して運営され歴史の長いコースは公立

の国家青年活動評議会マハラガマ・ユースセンター（National Youth Services Council Maharagama、以下 NYSC）と私立の日本語教育協会（Japanese Language Education Association、以下 JLEA）の2コースである。JLEA は元日本大使館付属日本語普及講座であり6ヶ月コースを年2回開講し4年間で中級日本語を学ぶことができ、最終目標として日本語能力試験2級を掲げている。JLEA と NYSC は1980年代後半から協力隊が継続的に派遣されている。

表 1
スリランカのタイプ別日本語教育機関

	教育機関	公立	私立
学校教育	初等教育	1 ^a	-
	中等教育	24	-
	高等教育	4	-
非学校教育	語学学校・講座	8	24
	社内教育	1	-
機関数合計		37	24

データ：在スリランカ日本大使館、

『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・1998年－』

a 中等教育機関の1校が併設している。

1.2. 日本語学習者

スリランカの学習者は『日本語教育事典』（1991）によれば1981年に242名の学習者が報告されている。その後1990年代の学習者数は表2のとおりで、学習者は増加している。特に1993年の1,060名から1998年の4,340名³⁾で、この間学習者は3倍に増加している。又、学習者増加率を機関別に見てみると中等教育機関の伸びが著しい。英語以外の外国語のAレベル試験受験者数は表3のとおりで、1986年には11名だった日本語の受験者数が1998年には429名に増え、人気のあるフランス語にせまっている。

表 2
学習者数の推移

年	1990	1993	1998	1993から1998の増加率%
初等教育・中等教育	51	183	2,717	1384.7
高等教育	26	139	245	76.3
学校教育以外の教育機関	529	738	1,378	86.7
総数	606	1,060	4,340	309.4

『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・1998年－』

『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・1990年－』

表 3
Aレベル試験 外国語受験者数

	1986	1987	1988	1990	1993	1994	1995	1996	1997 新シラバス	1997 旧シラバス	1998 新シラバス	1998 旧シラバス
フランス語	293	298	321	262	359	358	446	454	439	106	506	24
日本語	11	20	27	51	120	171	251	367	316	100	404	25
ドイツ語	42	51	44	40	39	34	38	51	24	16	20	8
ヒンディー語	6	2	2	3	0	10	22	37	56	25	62	12
ロシア語	6	3	6	15	10	8	3	0	0	3	1	0
中国語	0	1	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0
ウルドゥー語	3	3	0	0	0	3	2	1	0	5	1	10
ペルシャ語	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0

データ : Department of Examination in Sri Lanka

1.3. スリランカ人教師

1993年の国際交流基金の調査では30名、1998年には112名のスリランカ人教師が日本語を教えていた。彼らの教える機関、環境、資格は様々である。日本語教師になるための国の認定資格基準はない。かつて公的・民間の日本研修プログラムで日本へ行ったスリランカ人が戻ってから日本語を教え始め、特に1974年に一企業家が私塾を開き、それが日本大使館講座へと発展し、現在の日本語教育協会（JLEA）になった。1980年代後半には初級を教えられる教師は存在したが、初級後半から中級日本語は日本人が担当していた。しかし、この10年の日本語教育の広がり、ケラニア大学の日本語の学位をもった教師や日本留学経験をもつ教師の誕生、さらに国際交流基金の長期・短期日本語研修の成果があり、日本語能力試験の1級を持つ教師も出て、中級レベルを教えられるスリランカ人教師も若干育ってきている。問題はスリランカで日本語教師養成・再教育が充分行われていない点である。1996年から1997年の8ヶ月間、スリランカ国立教育研究所において講師養成講座が開かれたが、その後養成講座は継続されていないため現在スリランカには養成コースがないに等しい。そのために、教師の中にはAレベル試験を終えてすぐに教壇に立つ教師も珍しくない。かつて自身が学んだ時のノートだけを頼りに教えているのである。又、中等教育機関ではAレベル試験科目の外国語だけを教える教師は正職員として雇用されず非常勤で教えている。中には他の教科を教えつつ日本語を教える正規常勤教師も存在するがほとんどの教師は非常勤である。教師の給与や学校の協力体制は学校毎に異なる。このために教師の転職や移動が激しい。このように、10年前よりは教師の量も質も上がってきていることは確かであるが、学習者の増加に反して教師側の養成が充分に行われていないという問題がある。

1.4. 日本語母語話者教師

スリランカでは個人で日本語を教えている人が少ないため、日本から派遣される日本人教師はスリランカの主要教育機関の中で常に母語話者教師として大きな役割を果たしてきている。1999年3月時点で12名の日本人教師の内11名は次の機関に派遣されていた。

- ・ 国際交流基金（1名）
ケラニア大学 1名
- ・ 青年海外協力隊（5名）
日本語教育協会（JLEA）2名
国家青年活動評議会マハラガマ・ユースセンター（NYSC）1名
サバラガムワ大学 1名、ベリアッタ技術短期大学 1名
- ・ (財)シルバーボランティア（3名）
コロombo大学大学院 1名、日本語教育協会（JLEA）1名
ケラニア大学 1名
- ・ 民間派遣プログラム（2名） Aレベル校（女子校）2校へ各1名
- ・ 個人（1名） Aレベル校（男子校）1名

教師は各機関で日本語教授のほか、試験問題や補助教材の作成、中級レベル以上の日本語教授、コース運営、スリランカ人教師への日本語教授、教授法教授、スリランカ人教師間の調整等も期待されている。派遣任期が公的プログラムの場合通常2年間であるため、長期的にスリランカの日本語教育を把握できる人材が不足していて教師会等の活動の継続が難しい。

2. 中等教育の現状

2.1. A レベル試験

スリランカの国立教育研究所(National Institute of Education)は1995年Aレベル試験のシラバスを改訂した。その内容は試験の目的、52の文法項目（日本語能力試験出題基準の3級レベル）、指定教科書、試験配点を示している。目的は①日本語文法の理解、②書く、読む、聞く、理解力、翻訳力、口語表現力などの養成、③現代日本の短編小説の鑑賞、④日本の伝統・文化への理解である。学ぶべき文法項目は52項目で、学習漢字は『日本語初歩』で使用されている383文字をベースにして450とされている。指定教科書については『日本語初歩』と読解用教科書として『Pupils' Textbook for Japanese G.C.E.(A/L)』（1995）がシラバス改訂時に作成されている。日本文学についてはシンハラ語による小冊子が出版されている。Aレベル試験の内容は200点満点で翻訳30%、文法30%、作文27.5%、漢字7.5%、文学5%という割合で、翻訳・文法が大きな割合を占めている。この

シラバスをカバーし2年間で指定教科書2冊を限られた時間内に指導するためには、教師にシンハラ語で文法説明が可能なことと的確な翻訳力が求められる。

2.2. 1998年基金調査結果にみる学習者の学習動機

日本の高校生にあたる学生が卒業試験と大学入学試験、さらに将来の就職にも影響する重要なAレベル試験3科目のうちの一つとしてどうして日本語を学ぶのであろうか。1998年基金調査を見ると、中等教育機関の学習目的の1位は受験で次が日本文化知識、さらに日本語への興味、就職となっている。この調査は教育機関の日本語指導者か組織の長が記入することが多いことを考えれば、学習目的の1位が受験であるという結果は当然であろう。

2.3. 学習動機アンケート調査

Aレベル校のある3地域、コロンボ、ガンパハ、キャンディーの3地区の中から各2校を歴史の古い学校から選び、日本語学習者と非学習者にアンケート調査を行った。

対象校（開講年度、学校のタイプ）：

- コロンボ： 1. デヴィバリカ(1983、女子校)
2. ヴィサカ(1988、女子校)
- ガンパハ： 1. ナーランダ（1993、男女共学）
2. ラトナワリー（1995、女子校）
- キャンディー⁴⁾： 1. キングスウッド（1995、男子校）
2. スワルナマリー（1993、女子校）

回答数：学習者合計 108名 非学習者合計 134名

調査結果：動機を統合的、道具的、誘発的動機の3つに分けて表したものが表4である。46%が道具的、32%が統合的、22%が誘発的動機を持っていた。その内将来の就職を始め、仕事を意識した回答が25%にまで達した。又、日本語教師を目指している学生が9%存在した。Aレベル試験のためと解答した学生は全体の8名(6%)にとどまった。学習者がAレベル試験のためだけでなく各々自分の考えを持って学んでいることに注目したい。又、5校の日本語を選ばなかった学生にどうして日本語を選択しなかったかという質問の回答からは、日本語は競争率が高い又は他の科目は勉強し易いといったAレベル試験科目としての理由(35%)、日本語自体の理由(25%)、興味の問題(15%)、学習環境の問題(15%)、その他(8%)があがった。中でも多かったのは30名(22%)で日本語は難しい言語であると感じていることが判明した。

表 4
学習者（中等教育機関）の日本語学習動機

動機	人数 (%)
統合的動機	
日本の文化を知る	8 (6%)
日本を知る	11 (9%)
日本語に興味がある	10 (8%)
日本人と友達になる	11 (9%)
日本と関係を持つ	1 (1%)
(計)	41 (32%)
道具的動機	
将来の就職	19 (15%)
日本に関係した仕事を得る	5 (4%)
日本語の知識を生かした仕事を得る	5 (4%)
日本で働く	3 (2%)
日本語の教師になる	12 (9%)
日本で高等教育を受ける	5 (4%)
通訳になる	3 (2%)
日本へ行く	2 (2%)
国際的な言葉	2 (2%)
大学の講師になる	1 (1%)
スリランカの大学で日本語を勉強する	1 (1%)
(計)	58 (46%)
誘発的動機	
将来役にたつ	9 (7%)
Aレベル試験に合格	8 (6%)
日本へ行くチャンスを得る	1 (1%)
外国語を学ぶのが好き	8 (6%)
奨学金のため	2 (2%)
(計)	28 (22%)
回答数合計	127

%は回答数合計に対する割合
複数回答

2.4. 授業観察

アンケート調査を行った3地域でそれぞれ1校を選び、2時間から3時間の授業観察を、特に指示やフィードバックなどの教師の教室内の言葉と、指導順序に絞って観察を行った。学校の時間割は休み時間なしで1コマ40分から50分ごとに分かれていて学校の時間割によって1コマだけの授業や、2～3コマ継続した授業が行われていた。そのために1週間の時間割がその時間割に合わせて語彙、文法、作文、翻訳、漢字、小テスト等に分かれていた。

3校の教師の指示・フィードバックはすべてシンハラ語で行われていた。教師の日本語能力は2名が日本語検定4級合格、1名は2級を合格し国際交流基金の長期教師研修に参加している。指導順序については教科書を指導するという形で、

新出の語彙、文法を説明し、教科書をシンハラ語に訳していた。学習者は教科書内の問題に答える時以外は静かに教師の説明を聞き、ノートをとっていた。教科書を離れた教室活動は観察されなかった。限られた時間内で、かつ学校行事等で授業がつぶれることが多い時期もある中でAレベル試験のシラバスをカバーするのに教師は必死である。3校とも教科書は『日本語初歩』が国際交流基金の教材援助によって寄贈され、一人一冊が貸し出されていた。教室に黒板はあったが、OHP やカセットテープレコーダーやビデオ等は何も使用されていなかった。観察中日本語について目立った問題は教師が学習者に提示する新出文型・文法の例文の間違い、読解教科書の漢字の読みと例文等の間違いである。

2.5. 日本語母語教師の中等教育機関へのかかわり

1999年3月時点で日本の民間派遣プログラムを通して2名の日本人女性がロンボにある2校のAレベル校に派遣され、1名の日本人女性がガンパハ地区のAレベル校で教えていた。当時、協力隊のAレベル校への派遣は見合わせられていたため、協力隊の派遣はゼロである。しかし、協力隊は1993年から1997年の間、ガンパハ地区のAレベル校に1993年から1995年、1995年から1997年に各1名、2期(4年)にわたって派遣されていた。1997年で4年間継続された派遣が取りやめられたのは、隊員と国際協力事業団との協議によって決定されたものであるが、その背景には全国に数あるAレベル校の1校に日本人教師が協力する意味が問われ、又、スリランカ側に協力隊は単なるマンパワーという意識があること、さらに指導のために求められるシンハラ語のレベルが非常に高いため、派遣前3ヶ月のシンハラ語の訓練では日本語指導に求められるシンハラ語を獲得するには限界がある点などがある。民間派遣の日本人教師は、シンハラ語の訓練を受けていない点、派遣期間が協力隊のように2年間というはっきりした任期がなく、派遣された本人が決められることもあり、派遣先である学校側としてはAレベル試験のシラバスにかかわる点での協力は期待していない。文化紹介という形で折り紙や歌を中心に学習者と日本語で話す時間を提供されていた。民間派遣の教師は、派遣前に派遣先には教師がいないため初級者の学習者を教えるという情報を得て赴任したところ、実際にはスリランカ人教師がいてシンハラ語ができなければクラス活動が出来ない現実を知るケースを見聞きする。

3. 日本語母語話者教師のスリランカ中等教育への協力

3.1. スリランカ人教師支援

1990年代に学習者が急増したスリランカの中等教育機関で協力活動する日本語母語話者教師は少なく、1998年基金調査では機関カバー率が6.45%と低かった。今日まで公的・民間双方の日本語教師派遣が行われているが、Aレベル試験のシラ

バスをカバーするには翻訳力を含め高度なシンハラ語が必要であり、シンハラ語ができない場合は活動が文化紹介レベルに限られるのである。このような状況の中で、A レベル校への協力を日本語母語話者教師のスリランカ人教師支援という形をとるとその協力範囲は大きく広がると考えられる。民間派遣の短期滞在の教師、協力隊のように2年という任期が定まっている場合、それぞれのケースに合わせて協力の立案・実行が可能である。もちろん効率の面を考えればスリランカ人日本語教師養成・再教育講座という形をとった方がいいとも考えられる。しかし、そのための立案、計画、実行には時間がかかり、国、教育機関、スリランカ人教師、日本人教師間での綿密な調整が必要となり、その調整能力をスリランカで満たす日本人とスリランカ人の確保自体が難しい状況である。現状に照らして考えると個別の教師支援はより計画・実行しやすい方法であると思われる。

スリランカ人教師の状況は養成講座や再教育の場がないに等しい中で、教科書とかつて学んだ時のノートだけを頼りに指導している。さらに授業観察では教科書『日本語初歩』の練習部分の「おきかえ」、「言いかえ」、「といと答え」などの解答の間違いや、新出文法・文型の不適当な例文、読解用教科書の漢字の読み間違い等が目立った。学習者はA レベル試験のためだけに日本語を学んでいる訳ではなく、はっきりとした動機を持っているのである。重要なのは2年間日本語を学ぶ学習者に正しく初級日本語文法を教授するということである。そのためにはスリランカ人教師の日本語能力の向上が欠かせないのである。

3.2. 実施方法

スリランカ人教師支援の実施にあたってはスリランカの派遣先の要請があることが大前提になる。さらに協力する日本側に何ができるかをはっきり示せることが必要になろう。教師支援の方法として考えられる方法は個別で行うか、A レベル校を巡回して行うかの二つの方法が考えられる。1校に1名が派遣されてスリランカ人教師を支援する場合も、地域を巡回して行う場合も一長一短があり、個別の場合はきめの細かい指導や情報が提供できる反面、指導できる教師に限られる。さらにスリランカ人教師との間に良好な関係が築けない場合は支援が難しくなるであろう。巡回の場合は効率的に地域を回って指導が可能であるし、地域内でのセミナー形式の実施も可能である。セミナー形式で行えばスリランカ人教師間で情報交換し協力し合う場を提供できる。しかしながら、限られた時間内により良い情報や指導をどうバランスよく複数の地域で実行するかは日本人教師にその調整能力が求められる。

3.3. 支援内容

内容については教え方ではなく日本語そのものを扱い、それらは「指定教科書

の復習]、「作文」及び「文化紹介」の三つに絞られる。具体的には次のような項目がある。

1. 指定教科書(2冊)の正しい発音とアクセント及び漢字の読み
2. 新出文法・文型の正しい例文を作る
3. 『日本語初歩』の練習部分の答えのチェック
4. 『読解用教科書』の文法の例文及び問題の答えのチェック
5. 作文 (A レベルの過去の試験問題を復習する)
6. 文化紹介 (読解用教科書にある日本の年中行事や衣食住について)

以上の基本的な項目を指導する中から、スリランカの教育現場に必要な補助教材の作成や『読解用教科書』の周辺教材の作成等の活動へ拡大していくことも可能である。この内容の問題点は2.の例文を作る際に日本語をシンハラ語に正確に翻訳出来ないことであり、この点は経験あるスリランカ人教師に協力を求める。

おわりに

本稿では1990年代に学習者が急増した中等教育の現状を探ることによって、中等教育機関へ派遣される日本人教師が少ない要因のいくつかを把握した。今後の支援の可能性を日本語母語話者教師のスリランカ人教師支援という形を活動方法の一つとして示した。

この支援内容は現在使用されているAレベル試験の指定教科書2冊の復習という基本的なものであるが、現実に即したものであり今のスリランカ日本語教育の現場に必要なものである。スリランカに派遣される日本語母語話者教師が中等教育機関で行える一つの具体的な活動方法としてその内容を提示できたと考えている。しかし、Aレベル試験で求められるシンハラ語から日本語へ、日本語からシンハラ語へ訳す際の問題点、難しさ等の問題については全く取りあげることが出来なかった。又、日本人教師を受け入れる機関が教師に何を望んでいるかという点についても十分に考察することができなかった。

今後はスリランカの教育機関別の教師養成・再教育について検討することが課題であろう。この問題についてはまた稿をあらためて論じることにはしたい。

注

- * 青年海外協力隊員として1987年から1989年在スリランカ日本大使館付属日本語普及講座、1996年から1年間緊急短期派遣でスリランカ・サバラガムワ大学・社会科学・外国語学部で日本語教育に携わる。日本では主に技術研修生の指導にあたってきた。コロombo大学大学院日本研究科修士課程修了。

- 1) 1965年から2000年6月まで累計20,901名が途上国に派遣され、現在2,683名が派遣中。スリランカへは1998年までに計469名が派遣された。
- 2) マレーシアではマハティール首相が推進した東方政策の一環として1984年から教育省レジデンシャル・スクールに青年海外協力隊員が派遣されている。日本の技術を習得するために日本語の習得が重大要素として認識され、協力隊を中等教育に受け入れ、日本語がわかる人材育成を国家政策として行っている。
- 3) 『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・1998年－』によるとスリランカは日本語学習者数上位20カ国の20位である。
- 4) キャンディー地区の2校のうち、スワルナマリー学校はアンケート実施時に学生がいなかったことが判明した。他に日本語を教えるAレベル校が同地区になかったため調査は1校で行った。

参考文献

- (1) 国際交流基金 日本語国際センター(2000)『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・1998年－』
- (2) 国際交流基金 日本語国際センター(1995)『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・1993年－』
- (3) 国際交流基金 日本語国際センター(1992)『海外の日本語教育の現状－海外日本語教育機関調査・1990』
- (4) 日本語教育学会編(1991)『日本語教育事典』大修館書店 pp.741
- (5) 宮岸哲也(1997a)「海外の日本語教育への援助に関する一考察－スリランカの学校教育における日本語教育の改善を通して－」、『日本語教育』95号、日本語教育学会
- (6) 宮岸哲也(1997b)「スリランカの中等教育(Aレベル)における読解養成と日本文化の理解を目的として教科書の開発」、『広島大学日本語教育学科紀要』第7号、広島大学教育学部 日本語教育学科
- (7) 宮岸哲也(2000)「スリランカAレベルの日本語読解教材に関する諸問題－その評価、使用状況、及び改善について－」『安田女子大学国語国文論集』第30号、安田女子大学
- (8) Japan International Cooperation Agency Sri Lanka Office.(1998). JICA in Sri Lanka 1998. Sri Lanka: Author.
- (9) Miyagishi, Tetsuya. 1995. Japanese teachers' handbook for G.C.E. advanced level. Sri Lanka: NIE Press
- (10) Miyagishi, Tetsuya & Kamura, Nobuko. 1995. Pupils' textbook for Japanese G.C.E. (A/L). Maharagama, Sri Lanka: NIE Press

(11) National Institute of Education. 1995. General Certificate of Education (Advanced Level) Year 12 and Year 13 Japanese Syllabus. Maharagama, Sri Lanka: NIE Press

(埼玉大学 留学生センター)